

## 第1章 調査にいたる経緯と経過

今回の調査は、同志社小学校建設に伴い行われた。同小学校が岩倉校地の同志社高校北グラウンドに建設される計画が決定されたのは2004年度であった。

この地点に北接する京都市の公園領域では、そこがまだ同志社大学の校地であった1970年代後半に、施設立替などによって発掘調査が行われ、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭のものと考えられる土器や縄文土器の破片などが出土していた。また、当地点から叡山電鉄岩倉駅周辺にかけて地点で、同様に縄文土器や弥生土器片が出土することが、京都市教育委員会によって確かめられていた。そこで、京都市教育委員会は京都市公園領域から岩倉駅を含む範囲を岩倉忠在地遺跡という名の周知の遺跡として登録していた。

このような状態に呼応して、行政的な周知遺跡の範囲外の地点ではあったが、同志社高校理科館建設に伴って同志社大学校地学術委員会が発掘調査を行い、沼状地形に古墳時代～古代の土器片が少数散布する状況を確認している。このことから、同志社高校敷地内の中心部については岩倉忠在地遺跡の弥生～古墳時代集落などの周辺領域に相当すると考えられていた。しかし、今回の小学校建設予定地は周知遺跡の指定範囲と集落非形成領域の中間に位置しており、場合によっては同遺跡の形成が連続してそこまで展開していた可能性も想定された。加えて、同志社高校から東に50m程度の地点の同志社大学関連施設の建築に伴う2002年度の発掘調査では、古代の坪境施設と考えられる畦畔状遺構が検出されている。同志社小学校建設予定地では古代における条里関連遺構の残存も予測された。



図 1.01 調査区の位置（左は1909年の陸測図）

このような弥生時代～古代にかけての何らかの遺構が残存している可能性のある地点で建設計画が持ち上がったことから、本学の「大学会館・新町校地再編に伴う発掘調査委員会」では、何らかの調査の必要性があると指摘された。これを受けて、本学歴史資料館では建設計画の詳細が決定する前の2004年9月6日～24日に建設予定地の周囲および北グラウンドの代替地として新たに同志社高校グラウンドとして整備される岩倉野球場地点の試掘調査を行った。試掘地点は図1.01に示すように合計8箇所であった。この調査の結果は第4章に詳述するが、いわゆる土壌化の進行した古代以前の遺物包含層つまり生活文化層を確認することはできなかった。しかし、北グラウンド北東地点の試掘区において、地表面から約20cm程度の深さの砂礫層の中から古墳時代初頭の庄内式期と考えられる土器片が出土した。生活層自体は近世以後と考えられる耕作や整地によって削平されているものの、遺構などが残存している可能性は否定できない状態であった。

2004年11月に建設計画の詳細が決定し、2005年2月から施工を行う方針も打ち出された。そこで、歴史資料館では、建設に先立つ12月中旬より校舎建設位置にあたる北グラウンド西半部の発掘調査を開始した。調査に際しては、(株)アジア航測に測量・掘削・図面作成業務を委託し、現地で歴史資料館専任講師若林邦彦の指揮のもとに本学学生を含む同館非常勤職員らとともに調査作業にあたることとなった。当初は遺構の有無自体も不明であったため、校舎部分の外縁および中央に南北・東西方向に十字に幅4m程度の調査区を設けて作業を開始した。機械掘削を行うと、南西部地点で地表下約15cmの深さで方形の竪穴住居の輪郭を確認することができた。形成時期は、出土土器から考えて弥生時代末～古墳時代前期と想定された。また、その他の地点でも調査区内に多数の柱穴痕跡が検出され、当該期の生活遺構群は建設予定領域の全域に及んでいることが判明した。

この状況を受けて、12月下旬に歴史資料館と建設の担当課である本学施設課および同志社小学校準備室は協議を行った。第1に、隣接する北グラウンド東半部に校舎位置を移動させても、そこには同様の遺構群が展開している可能性が高いために遺構破壊や事前の発掘調査が避けられないことは明らかであった。第2に、検出層位が地表面からきわめて浅い地点にあり、遺構も全面に展開していることから、建設設計を変更しても遺構破壊を免れることが不可能なことは明白であった。第3に、同志社小学校建設の代替地はほかにはない状態でもあった。以上3つの理由で、予定された校舎建設地点の全面を発掘調査して考古学的記録を残し、遺構の分布状態によっては可能な限り設計変更を試みて遺構破壊を抑制する方針をとることとなった。

こうして、2005年1月から全面調査が開始された。廃土の移動を敷地内にとどめるしか方法がなかったため、一度に全面を調査することは難しかった。このため、北半部を先に調査し、後で反転して南半部を調査することとした。予想に違わず、校舎予定地の前面にわたって、古墳時代初頭を中心とした時期の竪穴住居・柱孔・土坑・溝や土坑墓群などが検出された。中には、後述するように、焼失住居なども検出され、竪穴住居の上屋構造が類推できる好資料も検出された。このため、1月21日に現地にて、再び学内の発掘調査委員会を開催して遺跡の重要性やできるだけ遺構保存に留意する方針が示された。また、1月下旬からは、南半部の調査を行いさらに竪穴住居群や谷部に多量の土器が廃棄されている状況などが明らかとなった。また、土器作りに関わる作業の痕跡と考えられる、焼成されていない白色粘土塊が多数出土した。そこで、このような状況を一般に周知すべく、2月13日に現地説明会を開催して調査状況の公開を行った。地元住民や考古学関係者など総計約500人に及ぶ多数の参加があった。

その後、遺構の記録作業などを進め、2月22日に現地を撤収して調査を終えた。調査の終盤で、焼失

住居1棟と土坑墓群の一部について、建物設計の変更を行い、遺構破壊を免れた。また、この竪穴住居1に関しては、(株)京都科学に委託して表面の剥ぎ取り作業を行い、小学校床下に遺構復元を行い、床面から覗き込める展示施設を設けることとなった。この復元遺構は、実際に2005年度に施工されて同志社小学校内の展示施設として完成した。

また、2005年度には、京田辺市の同志社大学歴史資料館において遺物整理作業や報告書作成作業を行った。こうした作業を経て本書が完成して刊行にいたることとなった。報告書作成に関しては、若林の指示のもと歴史資料館の非常勤職員や本学学生らが作業を行った。また、上述の白色粘土塊や出土土器の胎土分析については、(株)パリノサーヴェイに分析を委託するとともに、本学文化情報学部の高林弘美実習助手とも共同研究を行った。加えて、出土炭化材の分析には榎原考古学研究所の福田さよ子氏、炭化物の放射性炭素年代測定には国立歴史民俗博物館の小林謙一助手、地質学的分析には本学理工学研究所の中川要之助教授に協力をいただいた。これらの分析成果については、本書に掲載している。

なお、上記の遺跡調査成果に基づいて、京都市教育委員会からは、岩倉忠在地遺跡の範囲を当調査区の範囲にまで広げる方針が示されている。そこで、本書では、発掘調査時には「岩倉忠在地遺跡隣接地」としていたものを「岩倉忠在地遺跡」と名称を変更して報告書を作成した。調査成果が盛り込まれた本書の発行を受けて、京都市・京都府によって協議がなされ、正式に遺跡範囲が南側へ広がるものと思われる。

## 第2章 位置と環境

### (1) 調査地の位置と自然環境

今回の調査は、同志社小学校建設に伴って行われた。同志社小学校建設予定地は、京都市左京区大鷲町と忠在地町にまたがる地点に位置している。この地は、平安建都以後1200年以上にもわたって都市地として継続してきた現在の京都市街地の北方約数 km に相当する。建設地は、市街地のある京都盆地とは低丘陵で隔てられた小盆地である岩倉地域の中央やや東寄りの地点であり、元々同志社高校北グラウンドとして利用されてきた場所である。調査地の真東には比叡山山頂を望むことができる。

調査地は、岩倉川に東接する地点にある。後述するように、遺構群が検出された基盤層にはシルト質の堆積物とともに多量の礫が含まれていた。これは、現在の岩倉川の前身となる流路帯の流水作用によって北方の丘陵部の土砂が再堆積して形成された層と考えられる。堆積した土砂の粒度には礫・粗粒砂などが多数含まれているため、旧岩倉川の流芯近くの河川内堆積領域とその脇に形成された自然堤防といった環境変異を繰り返していた地点に相当し、縄文時代末以後には旧岩倉川は当調査地の西側のいずれかへと移動したものであると思われる。その詳細については、第7章の中川要之助氏による分析を参照されたい。つまり、古墳時代以後の当地点は、扇状地下部といった、比較的高燥な環境にあったと考えられる。ただし、調査地の南方約50mにある同志社高校理科館地点における1990年の発掘調査では、古墳時代以後の沼地と思しき窪地が検出されている。このことから、当調査区は、高燥な環境に位置するが、その近接領域には旧岩倉川流路帯近くの後背湿地が控えていたと考えるべきであろう。つまり、調査地点そのものは、安定的居住適地であるとともに、隣接して水田などへの利用が可能な湿地を眼前に控えた立地であったということが出来る。この環境が、後述する古墳時代初頭を中心とした集落形成の一因となった可能性は高い。

### (2) 歴史的環境

岩倉盆地では、古墳時代前期以前の遺跡は、遺物散布地がいくつか知られるだけで、今回のように集落遺跡が調査された例はほとんどない。

この地域では、5～6世紀の古墳と古代の窯跡がよく知られている。「夫火竟」銘の神獸鏡や鉄刀・玉類が出土した幡枝古墳などが古墳時代中期に築かれた後、6世紀には盆地南西部の丘陵斜面に群集墳が築かれている。6世紀後半に形成されたといわれる本山古墳群はその中でも最大規模のもので、40基を越える円墳が築かれ、横穴式石室が確認されている本山神明古墳は有名である。また、松ヶ崎丘陵の東側に、6世紀中ごろには西山古墳群が築かれていたと考えられている。

飛鳥時代には深泥ヶ池瓦窯跡・岩倉元稻荷窯跡・木野墓窯跡などで瓦・須恵器が生産されて京都盆地の古代寺院に供給されていた。奈良時代にも木野地区に数多くの須恵器窯がつくられて窯業生産地域として発達していた。平安時代造営以後は、栗栖野瓦窯などをはじめとする多くの窯跡があって、瓦・陶器類など多様な焼き物が平安京へと供給されていたことがわかっている。

このように、岩倉地域は、京都盆地の古墳時代有力氏族の墓域として機能していた。それが、古代以後に窯業生産拠点という性格を強め、平安京が造営されるとその生産拠点として益々窯業生産地としての重要性が高まったものと考えられる。

一方で、先述のように、集落遺跡の状況は各時代を通じて判然としなかった。今回の調査では、古墳時代初頭の集落遺跡を確認しており、岩倉盆地における人的活動を初めて明確に示したことになる。ま

た後述するように、当遺跡の範囲は、今回の調査地点にとどまらず北方約500mにある叡山電車岩倉駅付近まで想定されている。出土している土器は、弥生時代後期～古墳時代前期のものである。この範囲に弥生時代後期～古墳時代前期の集落が継続的に営まれていたことになると、この地が岩倉盆地の拠点的生活領域の一つであったこととも考えられる。

ただし、先述の古墳群の形成などは古墳時代後期を中心とした現象であり、今回検出した遺構群の主要な時期からは外れている。このため、この地が古代以前に継続的な集落形成地であったか否かは、いまだに判然としない。ただ、近接する大鷲町内での2001年の発掘調査では、古代の条里地割の相当する施設が検出されており、当地点とその近隣地域に古代の農業開発が行われていたことは確実である。

また、明治期における地形図には、その段階で現在の地割とまったく同じ水田区画が営まれていたことが明らかである。その時代には、当調査地点は水田として利用されていた。この状況がどの時期にまで遡るかについては、不明である。おそらく近世後半には確立していたと考えるのが自然であろう。



図 2.01 岩倉盆地周辺の遺跡（『京都市遺跡地図台帳』に加筆）